

## 第19回ヨーロッパ心臓病学会総会印象記

星崎 洋\*

第19回ヨーロッパ心臓病学会総会（XIX<sup>TH</sup> CONGRESS OF THE EUROPEAN SOCIETY OF CARDIOLOGY）は、1997年8月24日から28日までの5日間、スウェーデンのストックホルムで開催された。スウェーデンではすでに1956年と1990年の2回、本学会が開催されており、ストックホルムでの開催は今回で3回目である。今回の学会は、ストックホルム中央駅より電車で約10分の国際会議場で、シルビア女王の援助を受け、国を挙げての後援のもとに盛大に開催された。ストックホルムは大小14の島から成り立ち、美しく、清潔で水上の美と表現される世界一美しい首都の一つであり、1998年にはヨーロッパの文化都市になる予定である。

会場は、2000名を収容するメインホールをはじめ、シンポジウム、ディベート、一般演題などの口述発表セッションが26会場、広いポスターセッション1会場、3つの展示場の30会場より成っていた。応募演題数は、なんと7419題にのぼり、その中から2712題が採択された（採択率36.6%）。数十年ぶりの記録的な猛暑で北欧の8月下旬とは思えない気温約30度の中、冷房の効いた会場内で熱い討論が行われていた。メインセッションは、

- 1) 心疾患の予防に最も良いとされる地中海料理の何が本当に良いのか？
- 2) 急性冠動脈症候群後の危険階層化
- 3) アスピリンの過去と未来
- 4) 傷害心筋の適応
- 5) マルファン症候群
- 6) 突然死
- 7) 動脈硬化の原因は？
- 8) 肺高血圧

- 9) 急性心筋梗塞の再灌流療法戦略
- 10) 循環器領域の新しい外科的アプローチ
- 11) 心不全における大規模試験
- 12) 冠動脈ステントの現況

と臨床的な内容のセッションが多かった。また、シンポジウム、ディベート、一般演題は心臓リハビリテーション、運動生理学、心臓薬理学、心エコー図、細胞生物学、核医学、虚血性心疾患、冠循環、不整脈、肺循環、弁膜症、心機能、心不全、血栓症、高血圧、動脈硬化、心臓血管外科などの25セッションに分かれ、世界各国からの循環器領域の専門家による活発な討論が行われた。ポスターセッションは広い会場に半日単位で約300の演題を掲示し、討論時間は1時間だった。私事ではあるが、英語をあまり得意としない筆者にとってはその1時間は不安と緊張の、1日とも思える長い1時間であった。

最近、日本の学会では循環器病学だけでなく、全科を挙げて分子生物学に注目が集められているが、ヨーロッパ心臓病学会では臨床に則した内容の発表が多く、非常に興味深く参加することがで



写真 当センター院長（左）と筆者

\*群馬県立循環器病センター循環器内科

きた。特に、心不全に関しての成因、薬物療法の効果や長期予後の成績、不整脈に対するカテーテル焼灼術の長期予後、心臓血管外科での弁置換術や冠動脈バイパス術後の長期予後、などそれぞれのグループによる多施設での検討は施設、さらには国を越えた発表であり、とても参考になった。また、虚血性心疾患を含む動脈硬化に関しては、その成因、一次予防、治療、予後、二次予防などのそれぞれについて、いろいろな方面からの検討

が報告されており、多くの人の関心が寄せられていた。とにかく、多施設での検討が多いこと、偏ることのない多方面からの検討が多いことに驚愕しないではいられなかった。

以上、第19回ヨーロッパ心臓病学会総会の印象を総括してみたが、今後は今回の経験を生かし、次回のウィーンでの総会にも是非出席したいと考えている。